

銭湯ペンキ絵師

つれづれ日記

第17回

田中みずき (銭湯ペンキ絵師)



違和感

銭湯のペンキ絵について取材を受けたりイベントでお話をする中で質問をされたりする際、常々違和感を持っていることがあります。それは私のことを説明する際に、「唯一の女性絵師」といった紹介がされることです。事実ですが、果たしてそこに性別を示す必要があるのだろうかと思います。おそらく、現状では職人として働く女性の割合がまだ少なく珍しいからそういった表現になるのでしょう。こういったことが言われたい位、女性が働くことも当たり前になって欲しいと思います。

日本で女として働くのは面倒くさい

「女性」と認知されながら話をしていると、下記のような面白い状況に巻き込まれます。

まず、年齢を聞かれる際に「女性に年齢を聞くのも失礼なのですが」という謎の前置きが付きます。女性の若さに価値を見出す基準で気にされているのでしょうか。私は、様々な人物の伝記を読んだり、人の一生の年表を観たりするのが好きなので、人の年齢の情報は大切だと思っています。他者の生き方を観て、「この人は、この時代に、この年齢で、こんなことをやり遂げていたのか」という気づきから自分の人生プランの参考にすることは有用だと思っています。他者の生き方を鑑みて自分の人生をプランニングする方も多いでしょうし、その一例として自分の年齢が公開されても気になりません。

また、作風を「女性らしい」と評される風潮にも疑問を感じています。確かに、依頼に合わせて可愛らしい銭湯のキャラクターを描くこともあります。しかし、普通に描く絵では女性らしさを意識して描くことはありません。絵を描いた銭湯から「お客さんに、女の人が描いたと話したら驚いていた」と言われたこともあります。かつてインターネットに取材記事が出た際に女性らしい絵だという描写があったことがありました。その際は読者から、絵を観ても特に女性らしい絵であるとは感じないというコメントが出ていました。逆に、描き手が女性であるという先入観から生まれる

感想には偏見が含まれていると思うことが多々あり怖くなることがあります。

やはりメディアに出た際に、インターネット上で容姿についてのコメントが出ることもあります。自分は容姿が大切なアイドルではないのでどうでも良いですが、昨今、女性政治家の化粧にまで言及する風潮があることが気になります。女性でも男性でも、自分の思いに合わせて好きな格好をしていて良いと思うし、様々な容姿の人が居るのは当たり前です。容姿についての頓珍漢な反応をされるより、仕事を観てもらえれば嬉しいのです。

そして、これから弟子を取ることがあれば女性を選ぶかといったことを聞かれることもあります。今後、もし私が弟子を取ることがあっても、性別で選ぶことはないでしょう。女性を取る可能性もあるし、男性を取る可能性もあります。現状の銭湯ペンキ絵制作の仕事の説明した上で、弟子入りしたいという人物の人生プランを聞き、やっていけそうな方に伝えていきたいというのが現状です。とはいえ、まだ自分の実力をつけるのが先で弟子を持てるのは先になりそうですが。

一步一步

様々な人と話していると、今の日本で女の人はこういう風に観られながら仕事をしているのかと驚かされることが多々あります。とはいえ、実際の仕事の際には、現場にトイレはあるか（男女共用で問題ありません。）、男性に気を使わずに働けるのか、プライベートな人生についても考えていくことができるのか等確認する位で、意外と困難なく働けているように思えます。一つ一つ仕事をしていき偏見を変えていくしかないでしょう。この文章が早く過去のものになることを願っています。

プロフィール ● 1983年大阪生まれ。幼少時から東京在住。筑波大学付属高等学校進学後、明治学院大学在学中に銭湯ペンキ絵師・中島盛夫氏に弟子入り。現在は独立し、銭湯のペンキ絵のほか、老人ホームの浴室や店舗など制作の場を広げている。現代美術展覧会・レビュー情報サイト「カロンズネット」元編集長。ペンキ絵制作に関する活動は、ブログ「銭湯ペンキ絵師見習い日記」(<http://mizu111.blog40.fc2.com/>)にて随時掲載。